

## 「スタソーマ王本生」研究（一）

河野 智子

「スタソーマ王本生」は仏教文献のうちに豊富な所伝を有する話である。これについては、古く渡辺海旭によって詳細な研究がなされてゐる（“The Story of Kalmāsapāda and Its Evolution in Indian Literature,” *JPTS*, 1909）。本稿では特にパーリー・ジャータカ中の二所伝 *Mahāsatsumā-jātaka* (J 537) と *Jayaddisa-jātaka* (J 513) の過去物語を取り上げて考察を加えることにした。

渡辺海旭は次の四点をもつて、J 513 は明らかに J 537 の改作であると断言している。① スタソーマの役割がジャヤディサ王とその息子アリーナサットゥに二分されている。② 人食いがバラモン商人を捕えようとして足に怪我をするというモチーフが J 537 と同様に語られるが、J 537 に比べると不十分である。③ 四偈を説くバラモン、タッカシラーに住むナンダが登場するが、J 537 のように四偈自体が説かれることはない。④ 後日譚として小カンマーサダンマ村の成立が語られた後に、「スタソーマ大士によって人食いが調伏された場所は大カンマーサダンマ村という名前である」と J 537 の存在を前提とした表現が見られる。

確かにこの四点を見る限りでは、J 537 の方が本来的で J 513 は J 537 の一部を改作した垂流の感を免れない。しかし、ここで②③④が散文のみのモチーフで韻文には全く関与していないという

点を見落としてはなるまい。渡辺論文では韻文・散文の別が考慮されていないが、一応本伝としてのジャータカと見なされている韻文部のみを抽出し、より詳細に検討する必要があるであろう。

J 513 と J 537 では若干の偈頌が共通してゐる。

I *tan saṅgaram brāhmanassa-paddāya, saccānurakkhī punar āvajjasaṅ / J 513, 4cd, 6cd, 8c: J 537, 31cd, 38cd, 36d*

I' 下線部の変形 (1) *āvajjasaṅ J 513, 7cd: J 537, 37cd*

*āgato'smi J 537, 53cd, 60d*

II *mutto ca so porisādassa hantā, ganuvā sakam mandiram kamakāmi / J 513, 8ab: J 537, 39a*

II' 下線部の変形 *tuvam J 537, 33ab, 59ab, 63ab*

III *gacchāmihanim porisādassa \*hante// J 513, 9d: 537, 49d (\*kante)*

IV *muddhāpi tassa \*vipphaleyya sattadhā, yo tādisam saccavā-dim adeyya// J 513, 29cd: J 537, 72cd (\*vipateyya)*

一偈全体が一致するものは見当たらないが、以上の偈頌だけでも「スタソーマ王本生」の基本的骨格は的確に把握されている。すなわち、人食いに捕えられた王がバラモンとの約束を果たすために一時の猶予を願い出る。許されて城に帰り、バラモンに約束を果たした後、餌食となり再び人食いのものに向かう。人食いは真実を語る王の姿に心を打たれ、食べるのをやめる。主題となるのは王の至誠による人食いの改悛である。

では、韻文部全体を比較するとどうであろうか。J 513 の韻文部は、次のように三つの場面とそれらを繋ぐ解説から成っている。場面 I (1~7 偈) 人食いとジャヤディサ王の会話

仏による解説Ⅰ（8偈）

場面Ⅱ（9～14偈）ジャ王とアリーナサットウの会話・人食いの

もとへ戻ろうとする父王に対し、息子が身代わりを申し出る

仏による解説Ⅱ（15～19偈）アリーナの家族の悲嘆と祈り

場面Ⅲ（20～31偈、但し27偈は解説）人食いとアリーナの会話

仏による解説Ⅲ（32～33偈）

ここでは、基本的骨格にない要素として、場面Ⅱ・仏による解説Ⅱが見られる。息子が代理で人食いのもとに向かうという設定は、523に特有で、他のいずれの所伝にも知られない。これによって主題自体が変化し、「スタンーマ王本生」とは別の、新しい本生物語が成立している。人食いを改悛に至らしめたのは王の至誠ではなく、父を救うために自らの生命をも犠牲にするという崇高な行為なのである。しかし、この点を除くならば、523の韻文は実に基本的骨格に忠実で、新たなモチーフの添加などは見られない。

これに対し、523の韻文はずっと複雑で、偈頌の数も多い。

場面Ⅰ（1～4偈）カラハハッティ將軍と宮廷料理人の会話

仏による解説Ⅰ（5偈）

場面Ⅱ（6～22偈）カラハハッティとベナレス王の会話

場面Ⅲ（23～25偈）人食い（ベナレス王）と出家修行者の会話

場面Ⅳ（26～27偈）スタンーマ王とバラモンの会話

場面Ⅴ（28～38偈）人食いとスタンーマ王の会話

仏による解説Ⅱ（39偈）

場面Ⅵ（40～44偈）バラモンとスタンーマ王の会話・バラモンが

王に四偈を説き、王は彼に四千金を与える

場面Ⅶ（45～51偈）スタンーマ王と父の会話・四偈の値の過大を

「スタンーマ王本生」研究（一）（河野）

非難し、人食い殺害を言う父に対し、王が反論する

仏による解説Ⅲ（52偈）

場面Ⅷ（53～103偈）スタンーマ王と人食いの会話

場面Ⅷ（104～107偈）スタンーマ王と人食いに捕えられている百一

人の王の会話

場面Ⅹ（108～119偈）スタンーマ王と人食いの会話

場面Ⅺ（120～123偈）スタンーマ王の法話

このうち場面Ⅴ・Ⅶ・Ⅷが、523に対応する。ただし、Ⅶは親子の会話という枠組だけが同じで内容は全く異なり、Ⅷでは73偈以降に新しいモチーフ——人食いがスタンーマ王から四偈を聴くこと・王に四つの恵を申し出て、百一人の王の解放、食人肉の習慣の放棄などを約束する——が加わっている。

散文部も考慮に入れて、523と537の比較検討の結果をまとめると、次のような発展段階を想定することができよう。

- 1 原初形態：復元は困難だが、513と537の共通偈頌によって示されるような素朴な形であったと推定される。
- 2 分岐：一方は原初形態を忠実に受け継いだうえで新たなモチーフを加え、様々な潤色を施す。〔523〕他方は原初形態自身を改変、スタンーマ王の役割を二人に分割した結果、別の本生物語をなす。〔513〕
- 3 増広：それぞれ散文にて大幅に増広される。この段階で初めて513は537の影響を受け、一部のモチーフを借用する。（寺院職員）